

論 文

中山間地域におけるグリーン・ツーリズムの導入と成果

— 福岡県浮羽町の事例 —

朴 光 淳

1. はじめに — なぜ浮羽町なのか。

福岡県の南東部に位置する浮羽町は1995年10月 “グリーン・ツーリズムモデルの育成地区” として全国4箇所のひとつに選定された。本稿では浮羽町の事例を通じて日本のグリーン・ツーリズムに関する政策の推移とその成果を検討してみることとする。筆者は、1997年11月、98年4月、99年1月と4月、2002年6月など5回にわたって当町を踏査し、聴き取りなどを通じて資料を収集した。

浮羽町は次に詳細に説明しているように、福岡県の南東部、筑後平野の東側に位置している。全面積の3分の2は起伏が激しい森林地域で、標高100m以上の土地が全面積の80%を占めている。

浮羽町の特徴は山間部と平野部が明確に分かれている点である。姫治地区と呼ばれる山間部は巨瀬川、新川、小塩川の3流域で構成され、流域ごとに特色（滝、岩壁、虫など）のある景観を持っている。反面、平野部は田んぼと市街地が展開され、自然的障害物がほとんどない平坦なところである。山間部と平野部の中間は丘陵地帯で、主に柿、葡萄、梨などの果樹園として利用されている。このような特徴で名水百選としても選定された“清水湧水”が物語っているように良質の水が豊富で、昔から浮羽町の自然環境を表現するのに“緑と水”という言葉

が使われてきた。今も“緑と水、果物の里、浮羽町”と一般に呼ばれている。

このように浮羽町は多様な特性を持つ地域の集合体を形成し、これがグリーン・ツーリズムを推進するにおいて重要な資源になっている。しかし、このような多様な特性は却ってひとつの魅力ポイントにまとまらず、“だだの平凡な農村地域”という印象から抜け出すことができない。それ故に其の間、人口（特に若年層）減少、高齢化、住民のふるさとに対する自負心と郷土愛の不足などが悪循環し、さらに沈滞せざるをえなかったのが現実であった。

このような状況の中、1990年代に入り、日本政府の新しい農業および農村対策（“新農政”）が施行され（朴光曙，1998，121-124），その突破口のひとつとしてグリーン・ツーリズムを導入したのは周知のとおりである。1995年浮羽町は“(財)21世紀村づくり塾”によりグリーン・ツーリズム育成モデル地域のひとつとして選定され、それをきっかけに官民が一体化し本格的にグリーン・ツーリズムに取り組むことになったのである。

それから5年，“ただ平凡な中山村”に過ぎなかった浮羽町は“葛籠地区の棚田オーナー制度”の成功と“四季の舎，長岩”の繁盛，巨瀬川上流に位置する“調音の滝公園のそうめん流し”の盛況，小塩川流域の“蛍まつり”，そして柿や梨，葡萄の収穫期にその“狩り”を楽しむために一時的に訪ねてきた来訪客を常連客に転換させた，農家レストラン“ヤマンドン（夢語奇家）”の盛況，“森の家”の音楽と茶を楽しみに訪ねる来訪客たち，農家民宿が主管するジャズコンサートでの若い熱気，“道の駅うきは”のオープンなどにより，年間来訪客が100万人に急増しており，視察団だけでも延べ300組を越している。それほど，町内に活気が生き返っている。

このような浮羽町のグリーン・ツーリズムの熱気は1999年春，“(財)地域活性化センター”（自治省傘下団体）が主管する“第3回ふるさとイベント大会”で大賞を，農水産省が主管する“第7回美しい日本のムラ景観コンテスト”で

“棚田の応援団，彼岸花”が生産部門で“ムラづくり対策推進本部長賞”を受賞する基盤になったのである。

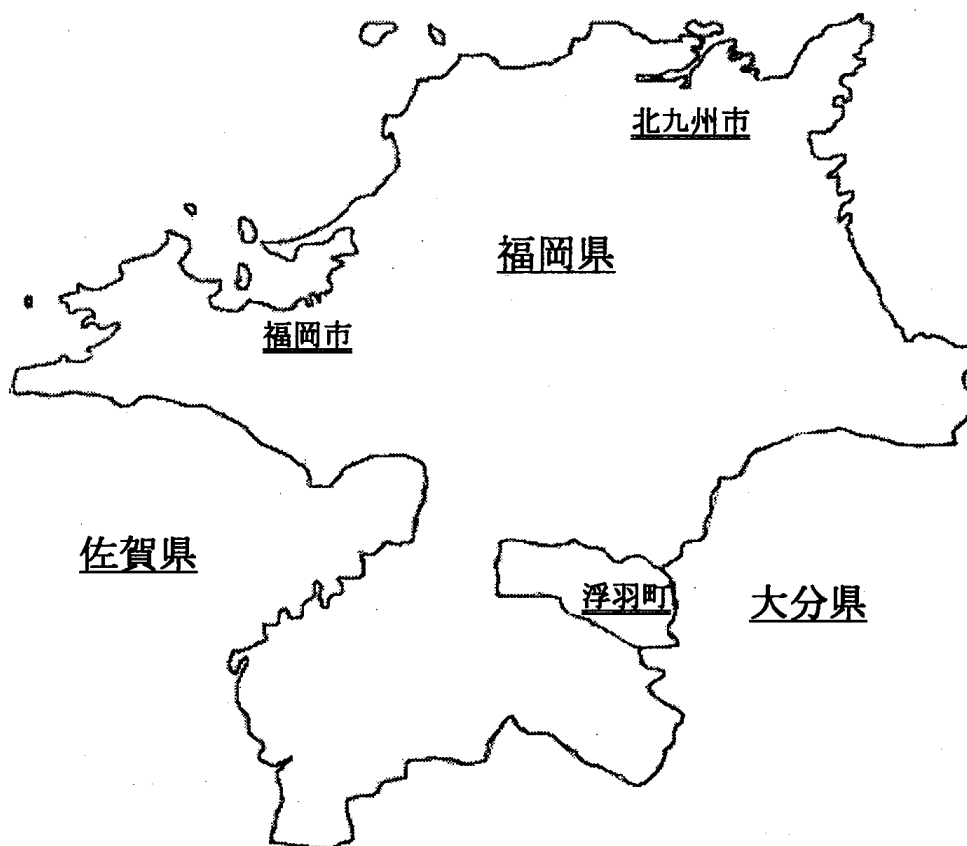
では，比較的短い期間中に何が浮羽町の溪谷をこのように変化させたのか。今後，残った課題は何であろうか。本稿ではこれらの問題を探ってみようとする。

2. グリーン・ツーリズムの導入と展開

1) 浮羽町の概況

(1) 浮羽町の地理的背景と産業構造

浮羽町は〈図1〉で見るとおり，福岡県の東南部，筑後平野の東の果に位置している。東は大分県日田市および日田郡まつえろんと接し，南は星野村，西は吉井町，北は筑後川を越え杷木町と接している。



〈図1〉 浮羽町の位置

浮羽町は1951年御幸町，姫治村，山春村，大石村の四つの町村が合併されることで誕生した町である（浮羽町1987，53）。総面積は89.26 km²，その中62%が山林であり，ほとんどは人工林である。耕地は23%の2,066 ha，田んぼと果樹園がほぼ半分ずつ占めている。東側から南にいたる境界には海拔600－800 mの津江および耳納山系の連山に囲まれ，北側に行くほど標高が低い南高北低の地形になっている。

気象は筑後川流域，平坦地，中山間地，山麓部により格差はあるものの，年間平均気温が15.9℃，降水量は2,200 mmで，全体的に農林業に適している。

人口は2000年末現在16,836人（男7,880人，女8,956人）で，1955年（S30）に比べ，5,028人減る反面，世帯数は4,685世帯で，むしろ1,021世帯が増加し1世帯あたり平均家族数は3.59人で2.4人が減り，核家族化の傾向を見せている。最近の人口動向を見ると〈表1〉のようになる。

〈表1〉 浮羽町の人口動向

	人 口	男	女	世 帯 数	1世帯当り家族数
1955	21,864	10,418	11,446	3,664	5.97
1965	19,371	9,057	10,314	3,821	9.07
1975	18,663	8,892	9,771	4,291	4.35
1985	18,925	9,067	9,858	4,500	4.21
1995	17,974	8,547	9,427	4,571	3.93
1998	17,847	8,439	9,408	4,738	3.77
2000	16,836	7,880	8,956	4,685	3.59

資料：国勢調査および浮羽町

浮羽町の産業構造を見ると，〈表2〉が示しているように1次産業が6.7%，2次産業が38.1%，3次産業が56.5%で，1次産業の比重が比較的の高いほうである（福岡県全体平均0.9%）。その分ほど，3次産業の比重は小さい。

就業構造を見ると、このような性格がさらに著しく現れる。1次産業の就業者の構成比は1999年末現在、18.9%で、福岡県全体平均3.7%（2000年）を大きく上回っており、反面、3次産業の就業者は23.8%ポイントも下回っている。

〈表2〉 浮羽町の産業構造〔1995、（ ）は1999年〕

	生産額（百万円）	構成比（%）	就業人口（人）	構成比（%）
1次産業	3,579（2,280）	10.0（6.7）	1,880（1,625）	20.7（18.9）
2次産業	13,218（12,919）	37.3（38.1）	3,260（2,918）	35.8（33.9）
3次産業	19,505（19,169）	54.7（56.5）	3,963（4,026）	43.5（46.8）
計	35,636（33,928）	100.0（100.0）	9,003（8,604）	100.0（100.0）

資料：福岡県統計年鑑（市町村民経済計算）1995（H7）、2000（H12）

*不一致は帰属利子などのためである。

一方、農家戸数は1,688戸（その内専業農家226戸）で、1985年以降離農現象が続いている。農業生産額は459千万円で、その内果樹が59.2%、米は11.5%を占めており、浮羽を“果物の里”と呼ぶ理由がうかがえる。（「福岡県統計年鑑」平成12。P.140）

最後に、浮羽町への交通事情を見てみると、JR久大本線が町の平坦部を東西に貫通し、町内に“筑後大石駅”と“浮羽駅”の二つの駅が位置し比較的便利であるが、特急は止まらないのが残念である。一方、久留米、大分間を結ぶ国道210号線が東西に走っており、又、1990年3月に開通した“大分自動車道路杷木インター”が5分距離にあり、そこから福岡市（空港）までおよそ1時間がかかり、交通事情は良好な状況である。

（2）浮羽町の観光資源

グリーン・ツーリズムにおいて何よりも重要な地域資源には自然景観をはじめ文化遺産、地域住民の優しさと生活文化など、すべてを含む。浮羽町が持っている

る主な観光資源を整理してみると〈表3〉のようになる。

〈表3〉 浮羽町の観光資源

景 観	調音の滝, うおがえりの滝, 斧淵の滝, 棚田, 合所ダム, 名水百選清水湧水, 水源の森百選, 森林浴百選, 分田の赤松杉林長岩, 蛍の里
文 化	古墳, 大石堰, くど造り民家, 大生寺, 本佛寺, 浮羽稲荷神社, 一の瀬陶窯址, 歴史民族資料館, 楠森堂
宿泊飲食 施 設	筑後川温泉郷 (ホテル, 旅館8棟), 葡萄屋 (季節料理), 大生寺 および西大寺の精進料理, 細流 (ヤマメ料理), イベザ (スペイン料理), 森の家
イベント	大石親子凧あげ大会 (1月), 合所ダム一周駅伝競技 (2月), バザラの里の植樹祭 (3月), 浮羽オグンチ (4月), うがい (5-10月), 岩屋堂蛍まつり・蛍コンサート (6月), 恵比寿まつり・筑後川温泉花火大会 (7月), 棚田 in 葛籠彼岸花めぐり (9月), 小塩村秋祭り (10月), 浮羽まつり・柿畑マラソン・一の瀬陶磁器まつり (11月), 小塩冬蛍まつり (12月)

資料：浮羽町, 「グリーン・ツーリズム推進事業報告書」1997.

2) 浮羽町におけるグリーン・ツーリズム導入以前の地域振興運動

今日, 日本のグリーン・ツーリズムに対する政府の支援は“グリーン・ツーリズム基本計画の策定”などによく現れているように, 主にソフト面に偏っている。新しい施設の設置など, ハード面への支援はほとんどない。したがって, 農山漁村のグリーン・ツーリズムに関する施設事業は山村振興事業, 離島振興事業のような既存の特殊地域対策事業の一環として推進されているのが現実である。浮羽町のグリーン・ツーリズムの展開状況を正しく理解するためには先ず, 既存の地域振興事業に関して検討してみる必要があるだろうと思う。

グリーン・ツーリズム運動が本格化される以前, 浮羽町で活用していた地域振興計画は1986年(財)九州経済調査協会に依頼して策定した“魅力のある里を目指して”(浮羽町の町勢振興基礎調査報告書)に基づいていた。以下, 「基礎調査報告書」を中心に浮羽町の地域振興の基本構想を整理してみよう。「基本構想」

では“浮羽町には多くの地域が今までの高度成長過程で破壊し、なくされてしまった自然と安らぎ、素朴な人情と親切がたくましく根を張っている。多くの町民が「水と緑」に恵まれているこの土地を愛し、強い愛情を持っている。そのような郷土愛を土台に住民の知恵とエネルギーを継承し、「子孫に誇れるふるさと、浮羽」を作るため、「働く嬉しさが満ちるふるさと、香りのある文化のふるさと、健全な人間形成のふるさと、生きがいの満ちた福祉のふるさと」を町勢振興の方向”（九州経済調査協会1986, 16-17）として設定した後、そのような方向を実現させるため、いろいろ施策を提示している。

その中、グリーン・ツーリズムと関連する部分を検討してみると、“浮羽町およびその後背地をなしている耳納、津江両山系を含む地域をひとつの“山村公園”（new forest village）に助成すること”を提案している。“山村公園では自然を楽しむ以外に、農地、山林、竹林を農林業の体験の場として整備し開放する一方、生きがいを求める趣味農業、イチゴ・なし・葡萄・柿などの狩りを楽しむ観光農園、竹の子狩りのための畑を整備する。また、“山村公園”の中で生産される山菜料理および川魚料理、陶磁器づくり体験などを楽しむようにする。文化財は大事に保存するとともに有効に活用する。山間部に散らばっている空家も有効に活用する方案を考える。山村公園が自然のままの山村の雰囲気を中心に維持・保存・創出する”（九州経済調査協会1986, 18-19）と提案している。我々は、そこに浮羽町のグリーン・ツーリズムの芽を求めることができるだろうと思う。

このような構想は1994年になると、より具体化されるようになるが、浮羽の住民は地域活性化のため、どうしても浮羽町の基幹産業である農業の振興が不可欠であることを再認識し、“浮羽町わが町農業活性化推進協議会”を構成するようになる。この“協議会”には農民や農業関係団体のみならず、町内のすべての団体、すなわち商工会、観光協会、森林組合などを含む各界各層が参加し、そこで“農業の活性化が即ち町の活性化”という趣旨の下で繰り返しその実現方案

を論議するようになったのである。その結果、翌年(1995)3月には“わが里農業活性化基本構想”を策定したのである。その要旨は、基幹産業の農林業を自力で活性化する方策として“適地農業”を展開するということである。すなわち、平坦地は米・麦中心、山麓部は果物中心、中山間地は複合経営、すなわち“都市との交流”を活性化の一環として推進していくということであった。

このようにして、浮羽の人々はすべての町民が力を合わせ、“都市との交流・連携による活性化”を推進するようになったのである。このような自助的努力が評価され、その年10月、農林水産省のシンクタンクである“財団法人21世紀村づくり塾”により浮羽町が“グリーン・ツーリズムモデル育成地域”として選定され、浮羽のグリーン・ツーリズムは本格化するようになったのである。

3) グリーン・ツーリズムの導入・展開過程

浮羽町のグリーン・ツーリズムの導入・展開過程を全国事業とともに年月別に整理すると次のようになる。(浮羽町，“広報第275-335号”。○は浮羽町事業，*は全国事業である)

*1992年4月 農林水産省構造改善局長の諮問により“グリーン・ツーリズム研究会”が中央に設置される。

7月 同研究会が“グリーン・ツーリズムを提唱—農山漁村で楽しむゆとりのある休暇”というタイトルの報告書を報告

*1993年4月 農林水産省が“農山漁村でゆとりのある休暇を！”国の推進事業として創設したが、その内容は次のとおりである。

①全国グリーン・ツーリズム支援事業(農林水産省の委託により“財団法人21世紀村づくり塾”が担当)

②都道府県グリーン・ツーリズム支援事業(事業主体：都道府県)

③グリーン・ツーリズムモデル整備構想策定事業(事業主体：市

町村)

- 1991年3月 “森の家”（音楽と茶の音楽館）、新川地区城山にオープン
 - 1994年4月 農業・農村活性化推進事業開始。福岡県・町・農業委員会・議会・農協・商工会・観光協会・農家代表などで「浮羽町内ふるさと農業活性化推進協議会」を設け、1995年度以降の農業振興方針を協議。そこで都市との交流による農業・農村の活性化に対する論議が行われる。
 - 4月 “夢酔塾”（地域活性化運動のための民間団体）発足
 - * 6月 “農山漁村滞在型休暇活動のための基盤整備促進に関する法律”（別称、グリーン・ツーリズム法）制定
 - 1995年4月 “浮羽町わが里農業活性化基本構想”を策定するために推進大会開催
 - * 6月 財団法人農林漁業体験協会が農家民宿の登録制度開始
 - 6月 小塩溪谷の女子尾地区で冬“蛍 illumination”をはじめ。小塩地区公民館主宰で“蛍まつり”始まる。
 - 9月 “第1回棚田 in 浮羽彼岸花めぐり”実施中台風で中止
 - 10月 “滝の溪谷”に国武氏“農家民宿”オープン。“滝の溪谷ジャズコンサート”開催
 - 10月 “財団法人21世紀村づくり塾”全国グリーン・ツーリズム支援事業の一環として“推進モデル育成地区”を全国で四ヶ所選定。浮羽町もそのひとつとして選定される（九州では一ヶ所）
 - 10月 浮羽町グリーン・ツーリズム研究会を組織。“21世紀塾”の支援で“地域資源調査”に着手。
- 研究会は浮羽町の各界各層の代表者120人で構成され、事務局は“町企画振興課”に置いている。研究会は“浮羽町グリーン・ツー

リズムモデル整備構想・市町村計画”のための学習を継続する一方、1998年3月には“宝地図”を制作。現在各地区でグリーン・ツーリズムの実践活動を導いている。

- 11月 “財団法人21世紀村づくり塾” 第2回現地調査。“第1回グリーン・ツーリズム・シンポジウム” 開催
- 12月 第2回グリーン・ツーリズム・シンポジウム開催。主題はグリーン・ツーリズムとは何か？—浮羽・進歩・自由・夢
- 1996年1月 婦人会幹部学習会・新川公民館学習会。主題は“グリーン・ツーリズムとは何か。”
- 2月 大石地区，姫治地区住民意識調査。懇談会
- 3月 御幸地区，山春地区住民意識調査。懇談会
“21世紀塾” 第3回現地調査
- 4月 “グリーン・ツーリズム研究会” 会員9人ヨーロッパ視察
婦人会地区別学習会
- 7月 “第3回グリーン・ツーリズム・シンポジウム” 開催。主題は
“浮羽型グリーン・ツーリズムを考える”（主題報告：東京大
武内和彦教授外）
- 8月 農家レストラン “浮羽果樹村ヤマンドン”（夢語奇家，Mu Go
Yo Ka）オープン
- 9月 “第2回棚田 in 浮羽彼岸花めぐり”（イベント）実施（六日間）
- 10月 グリーン・ツーリズム講演会開催。主題 “魅力のあるわが里つ
くり”。講師は平岡豊氏
“第2回滝の溪谷ジャズコンサート” 開催
- 11月 グリーン・ツーリズム講演会開催。主題は “自然は誰が造るの
か—農村の公益的機能”。講師は宇根豊氏

アンテナショップ“浮羽の森 IBIZA” 東京都目黒区に開設

- 12月 “第4回グリーン・ツーリズム・シンポジウム” 開催。
“21世紀塾” 現地調査中間報告会開催
UJI ターン（帰農）希望者合同説明会開催
- 1997年3月 “第5回グリーン・ツーリズム・シンポジウム” 開催。
主題は“浮羽型グリーン・ツーリズムの構築を向かって”
- 4月 “農山漁村でゆとりのある休暇を！” 推進事業（グリーン・ツーリズムモデル整備構想策定事業）に着手
- 5月 町内93行政区別に“地域の宝探し” 募集開始。空家実態調査および所有者に対する意向調査実施。農家民宿・公民館民宿視察研修（熊本県小国町）
- 7月 グリーン・ツーリズム研究会。“浮羽よい所探訪”（新川葛籠地区）
- 8月 公民館民宿。“日森園山荘” 岩溪谷でオープン
グリーン・ツーリズム研究会，“浮羽よい所探訪”（妹川地区）
- 9月 “九州ツーリズム大学”（熊本県小国町）開校。研究会員の中で4人入学。石垣保存実行委員会設立。町内の石垣保存活動実施。
“第3回棚田 in 浮羽彼岸花めぐり”（イベント）実施（七日間）
- 10月 “第6回グリーン・ツーリズムシンポジウム” 開催。
“21世紀塾” 現地調査最終報告
B. レイン教授を招き，講演会開催。主題は“ヨーロッパのツーリズム事例研究”
グリーン・ツーリズム研究会。“浮羽よい所探訪”（袋野トンネル周辺）
新川・葛籠地区，“棚田オーナー制度” 募集開始

- 11月 “第1回グリーン・ツーリズムモデル整備構想策定委員会”開催。
- 12月 “第1回グリーン・ツーリズムモデル整備構想策定専門委員会”開催。
小塩地区中崎村佐藤氏家の庭が“花と緑のコンテスト”で“優良賞”受賞。
この庭は佐藤家が3代にわたり、家の裏を開拓し、花と木を植え庭を造ってきたが、その庭の中に休憩室のみならず、ガーデニングの体験などもできるようにしている。
- 1998年1月 “第2回グリーン・ツーリズムモデル整備構想策定専門委員会”開催。
- 2月 グリーン・ツーリズム研究会。“浮羽よい所探訪”（大石春山地区）
- 2月 グリーン・ツーリズム研究会。“浮羽よい所探訪”（御幸地区）
- 3月 “専門委員”の先進地視察研修（兵庫県八千代町。京都府美山町）
グリーン・ツーリズム研究会。“浮羽よい所探訪”（小塩地区）
グリーン・ツーリズムモデル整備構想・市町村計画（案）策定
- 4月 “四季の舎、長岩”（葛籠地区棚田交流拠点施設）オープン
- 8月 “小塩蛭村づくり協議会”設立
- 10月 “第4回棚田 in 浮羽彼岸花めぐり”実施（五日間）
- 12月 新川葛籠地区第2回“棚田オーナー制度”更新。希望者殺到。
継続率84%。小塩の岩屋堂地区道路管理に建設大臣賞および日本道路協会会長賞受賞。“蛭広場”完成
- 1999年2月 農水産省主催“第7回美しい日本のムラ景観コンテスト”で浮羽町の“棚田の応援団、彼岸花”が生産部門で“農林水産省村づくり対策推進本部長賞”を受賞。

- 4月 自治省傘下“財団法人地域活性化センター”主催“第3回ふるさとイベント”コンテストで“棚田 in 浮羽彼岸花めぐり”が優秀賞を受賞

*「食料・農業・農村基本法」制定。その中(36条)で「都市と農村との間の交流の促進」を明記。

- 2000年2月 町内外の希望者からの注文を受け、棚田の彼岸花などを素材(5種)とした“棚田名刺”を1組100枚ずつ200組(2万枚)を製作し、無料配布。4月に注文が殺到し、再び200組を製作し無料配布。

*「食料・農業・農村基本計画」では、「農村における滞在型の余暇活動(グリーン・ツーリズム)の推進」を明記。

- 2000年4月 「道の駅うきは」(総合交流ターミナル)オープン

- 2000年9月 “第6回棚田 Summit”開催。全国57個の市町村の代表と企業が参加し、棚田を主題にしたグリーン・ツーリズムの推進方案を論議。(星野村と共催)

*2002年11月 NHKが“浮羽—少年たちの夏”を制作放映

上で、浮羽町でグリーン・ツーリズムがどのようにして導入・展開されてきたのかを重要事業別に検討した。ここで我々が感じ取れることは、官が導いているとしても可能な限り住民の合意に基づいて協調を引き出す、いわゆる“協調的内発融合型”地域振興運動にしようとしているという点である。このような事実は浮羽町が“モデル育成地区”に選定された1995年10月から1996年8月にまでのわずか10ヶ月の間に10回のシンポジウム、現地調査、住民意識調査など各種集いを開き、住民の同意を得ようと努力していることから伺える。

4) 浮羽型グリーン・ツーリズムの基本理念と推進戦略

(1) 基本理念

1996年3月、東京青山で開かれた“グリーン・ツーリズム国際シンポジウム”(21世紀塾主催)でパネルリストとして参加した浮羽町の当時の助役であった高木典雄氏は浮羽町が構想しているグリーン・ツーリズムの意義と方向に関して次のように説明しているが、そこに浮羽町グリーン・ツーリズムの基本理念が明確に現れていると思う。その要旨は次の如くである。

“浮羽町では基幹産業である農業を自らの力で活性化しようと2年前から「浮羽町わが里農業活性化事業」を推進している。それによると、平坦地は米・麦中心、山麓地は果樹専門、中山間地は複合経営・都市との交流など、地形に合う「適地農業」を活性化事業の一つとして進めている。グリーン・ツーリズムは中山間地活性化の新しい戦略として推進しようとする。”

“浮羽町が抱えている課題は大きく二つにまとめられる。そのひとつは「人口減少」であり、もうひとつは「若い人々が地域に対して誇りを持っていない」ということである。次の世代のリーダーになれる若い人に自信と誇りを持たせることに行政施策の重要ポイントを置かなければならないと思う。そうして浮羽町の行政ケッチプレイスは若い人々が再び戻ってきて、定住してくれることを望む意味で、「定住から交流へ、そうして再び定住へ」である。このようにグリーン・ツーリズムを農業活性化という立場からのみではなく、町全体の振興、全町民がともに参加する地域振興の一環として推進して行こうとする。”

“グリーン・ツーリズムのポイントは二つだと思う。一つは町全体と都市との交流を通じた経済的波及効果の実現である。すなわち「地域経営に役に立つこと」。言い換えると、一般農家民宿で見られるように単純な農家・農村の多角経営化施策に止まってはいけないということであり、もうひとつは住民参加型、すなわち全町民がともに参加する「住民参加の運動」であるという点である。グリーン・

ツーリズムを通じて都市住民と交流するのは一人一人の地域住民である。したがって、主人公である地域住民の理解と熱意が何よりも大事であると考えている。”
(浮羽町1997. 4 - 5)

以上でわかるように、浮羽グリーン・ツーリズムの基本理念はそれを通じて都市住民から理解と応援を受け取ることができる町，“全町民が自信と誇りを持つ町”を作ることであると要約できると思う。

(2) 基本方針

では、このような理念を実現するためにはどのような施策を策定・実施しているのだろうか。まず、基本方針を検討した後、各地区別推進戦略に関して検討してみることにする。

浮羽町は次の三つを基本方針として提示している。

①都市住民との多様な交流：長期滞在に執着せず多様な形態の交流をめざす。
ヨーロッパで流行しているルーラル・ツーリズムや日本政府が推進しているグリーン・ツーリズムは主に長期滞在を前提にしている。すなわち交流形態＝長期滞在と考えている。しかし、日本人の労働時間短縮推進状況や日本人の旅行観、余暇時間の活用方法などを考慮した場合、長期滞在にのみ執着することは望ましくない。したがって、浮羽では長期滞在（宿泊）はもちろん，“日帰り”からU.J.Iターン（移住）にいたるまで広範囲の交流を促進する。

②住民参加による内発融合型の運動

グリーン・ツーリズムの対象地域に選定された地域は一般的に“美しい町”である。しかし，“美しい町”とは“景観10年，風景100年，風土1000年”といわれているように、長い歴史の中で作られてきたものである。

“美しい町”や“地域イメージ”の創出過程では地域運動の主体を行政当局が主導すべか。そうではなくて、住民が主導すべきかという二者択一のように考え

るべきではない。行政と住民が各々の役割を認識し、それにより、行動するのが大事である。したがって、浮羽町ではグリーン・ツーリズムを推進するのに当たって、地域住民が自然生態系や伝統文化の価値を重視しながら主体的に行うようにし、行政当局はそれを支える方式の“官民の協調的な内発融合型”地域運動を追及すべきである。

③総合的・長期的な地域経営戦略

農家レストラン、農家民宿、特産品開発、農林業体験という形の表面的な形式にかかわらず、むしろ“グリーン・ツーリズムとは農山村地域への人口の増加と定着化に基づいて、農林業や農林産物、それと関連された領域は言うまでもないが、他産業までを含んだマーケティング活動を展開していくことで、その波及効果を地域全体にまで広げていく運動”という理念のもとで総合的で、なお長期的な“地域経営”の立場から推進すべきである。

以上の基本方針を通じて、我々はいわゆる“浮羽町グリーン・ツーリズム”の特性を次のように要約することができる。すなわち“浮羽型グリーン・ツーリズム”とは都市住民との多様な交流を通じて、彼らの理解と応援、言い換えると都市住民のエネルギーを導入し、農林業のみならず地域内のすべての産業に波及効果を拡散させ、地域の活性化を図るが、これはあくまでも住民の主体的な参加と行政の支援が結合した協調的な“内発融合型地域運動”として推進するということである。

(3) 地区別推進戦略 — 串団子理論の実践

上で説明したように、浮羽町は平坦部、山麓部、そして中山間部が明確に分かれているだけでなく、地区ごとに独特な自然資源と生活文化を持っている。したがって、多様ではあるが、ひとつにまとまらない。魅力ポイントがない、どこにもありうるだだの農山村とも言える。そうして、“何もない浮羽”と言う人さ

えいるほどである。

したがって、浮羽のグリーン・ツーリズムが成功するためには地区別特性に合わせた事業を開発・整備すべきではあるが、それらを町全体としてひとつに束ねる作業、すなわちネットワーク化がより緊要であるといわざるを得ない。

ここで登場するのが、いわゆる“串団子理論”である。日本人が好む団子は本来小さいので、一個、二個だけ食べると足りない。少なくとも四個か五個を食べないと食べた気がしない。よって、四個ほどの団子を串にさして甘い汁をつけて売るのが一般的である。串にさすのは手で持って食べやすくするためであろう。“串団子理論”とはこのような理屈を活用して浮羽の各地区別に新しい交流拠点＝核（団子）を形成し、それをネットワーク化し（串に刺して）シナジーを大きくし、地域振興の波及効果を増大しようとする試みである。

各地区別に浮羽町が構想・推進している重要な事業とそれを図式化すると、次のようになる。（図2参照）

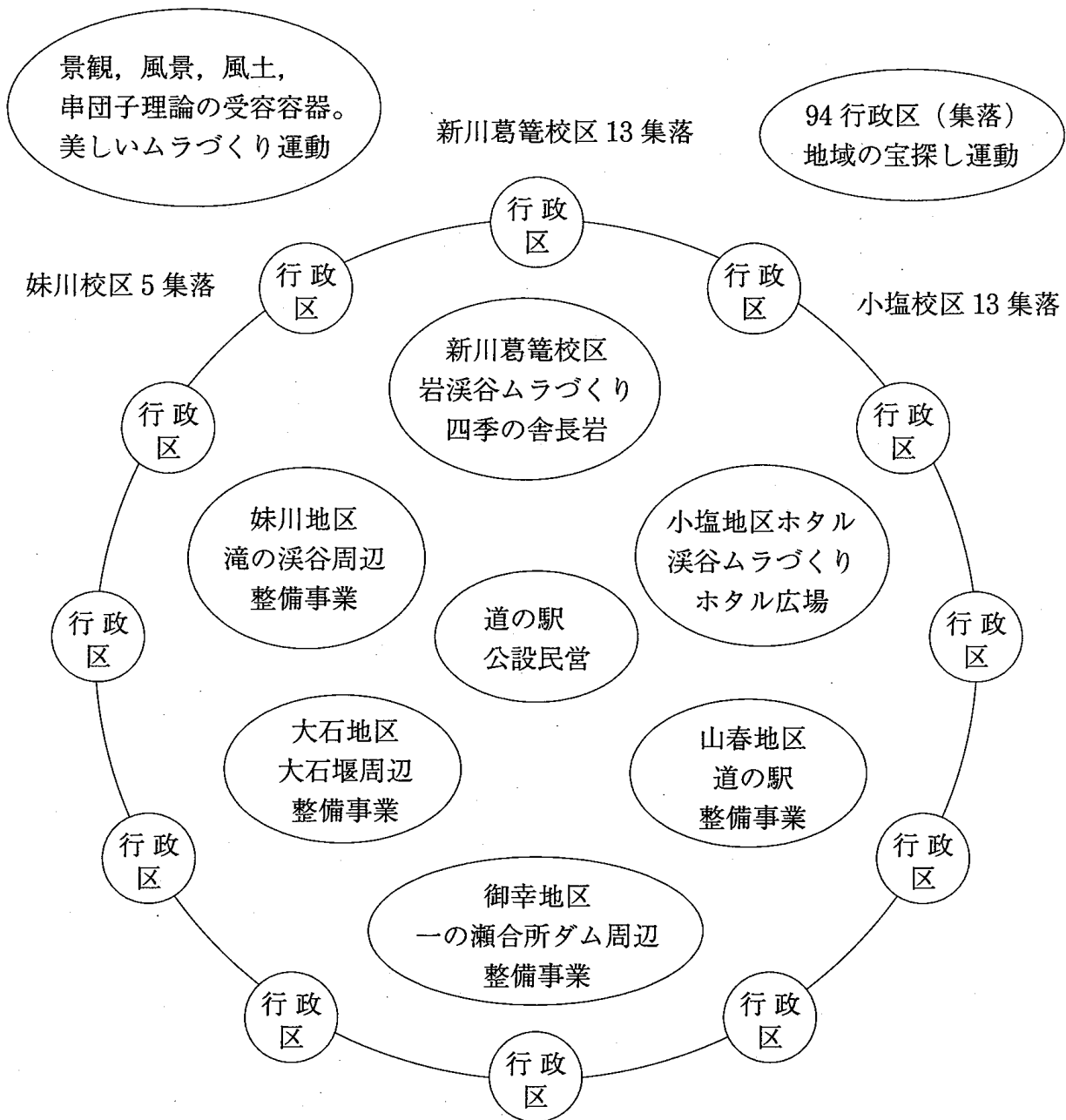
- ① “道の駅うきは”・総合交流ターミナル整備事業—山春地区
- ② 長岩公園周辺および葛籠棚田整備事業—新川・葛籠地区
- ③ 蛸広場周辺整備事業—小塩地区
- ④ 調音の滝公園周辺整備事業—妹川地区
- ⑤ 筑後川大石堰周辺整備事業—大石地区
- ⑥ 合所ダム・“一の瀬”周辺整備事業—御幸地区

次は、各地区別に推進している事業の概要とその現況を見ることにより、浮羽町のグリーン・ツーリズムが現在どのように行われているのかを検討してみよう。

① 小塩地区：“蛸溪谷の町づくり”

浮羽町の東先に位置している小塩地区の川辺には昔から蛸がたくさん棲息し、福岡県の中で“蛸の名所”として知られているところである。この地区では

“蛍が棲息できる環境を守る活動”を早い時期から展開する一方、都市住民との交流を促進するために“小塩村の秋祭り”（1988年始まる），“蛍まつり”（1995年始まる），“冬の蛍祭り（illumination）”（1995年始まる），“クラシック・コンサート”（1995）などを実施し、冬も多くの都市民を引き寄せている。



〈図2〉浮羽型グリーン・ツーリズムの推進戦略（串団子理論の実践）

一方、浮羽町の三つの溪谷のなかで傾斜がもっとも緩やかな小塩地区は早い時期から付加価値の高い花（菊の花）、イチゴなどの栽培団地が助成され、機械共同利用組合の設立など農業振興を通じた地域活性化が活発なところである。

他方、地区の重要な資源である蛍が棲息できるように環境整備事業として“蛍広場”を整備し、1998年8月には“小塩蛍町づくり協議会”を設立するだけでなく、この町の産物には何でも“蛍”という名前をつけ（例：“蛍町のイチゴ畑”，“蛍町の営農組合”など）、地域活性化に蛍を十分活用している。（小塩蛍町づくり協議会1999，3-4）。

また、この地区の中崎村では民間の庭がよく整備されているだけでなく、ガーデニングなどの体験もできる施設などを備えて、都市住民を引き寄せている。この庭園が“花と緑のコンテスト”で受賞したことがあるということはすでに指摘したとおりである。

②新川・葛籠地区：岩溪谷の棚田と彼岸花を資源とする町づくり

今日、浮羽のグリーン・ツーリズムといえば、棚田とそこに咲いている彼岸花（夏水仙）を活用する各種イベントと彼らの交流拠点である“四季の舎長岩”を思い出すほど、新川・葛籠地区はグリーン・ツーリズムの熱気があふれるところである。

この町の資源と施設、イベントなどを中心に浮羽のグリーン・ツーリズムの現況に対して検討してみよう。福岡県の“森林浴百選”のひとつとして選定されたこの溪谷の入り口には“合所ダム”と言われる巨大なダムが1986年建設され、その周辺に“合所ダム”と“ウグイス広場”などが整備されている。その上流に位置する新川・葛籠地区には鬱蒼な森林と棚田など、美しい自然景観と奇岩長岩の“長岩城址”と重要文化財（指定文化財）に指定されている“クド造り民家—平川家”など、歴史的な文化遺産も多い。

このような自然・文化資源などを利用して，“森の家”，“スペイン料理店”，民間人による小規模美術館など文化観光施設が開設され，浮羽町の交流の拠点の役割を果たしている。

また，この溪谷で行われるイベントは多様であるだけでなく，独特な魅力を持っていて，今日浮羽グリーン・ツーリズムのシンボル・イベントになっている。重要なことだけをあげてみると，“バサリまつり”，“浮羽の棚田彼岸花めぐり”，“葛籠山ムラ祭り”，“棚田オーナー制度による農業体験”などがあげられる。

来訪客の交流拠点としては1997年8月にオープンした民宿“日森園山荘”，1998年4月に開館した交流施設である“四季の舎，長岩”をあげられるが，特に後者はその運営方式と施設の面で今後他地域の山村にグリーン・ツーリズムを導入する場合，よいモデルになれると思われるので，より詳しく考察してみようと思う。

“岩溪谷”の上流，新川・葛籠地区には棚田が階段状に展開されている。その畦の下は石土塀，上は土で作られていてそれ自体が奇異な景観をなしている。さらに，その畦には夏の終り頃から秋の初めにかけて彼岸花の赤い花が満開し，その頃の溪谷は炎のように美しく染まる。

浮羽町ではグリーン・ツーリズムの推進と共に，この棚田を二つの方法で活用し都市民との交流の媒体にしている。その一つはすでに言及したように，“彼岸花めぐり”といわれるイベントであり，もう一つは棚田を都市民の農業体験場として活用させる“棚田オーナー制度”である。

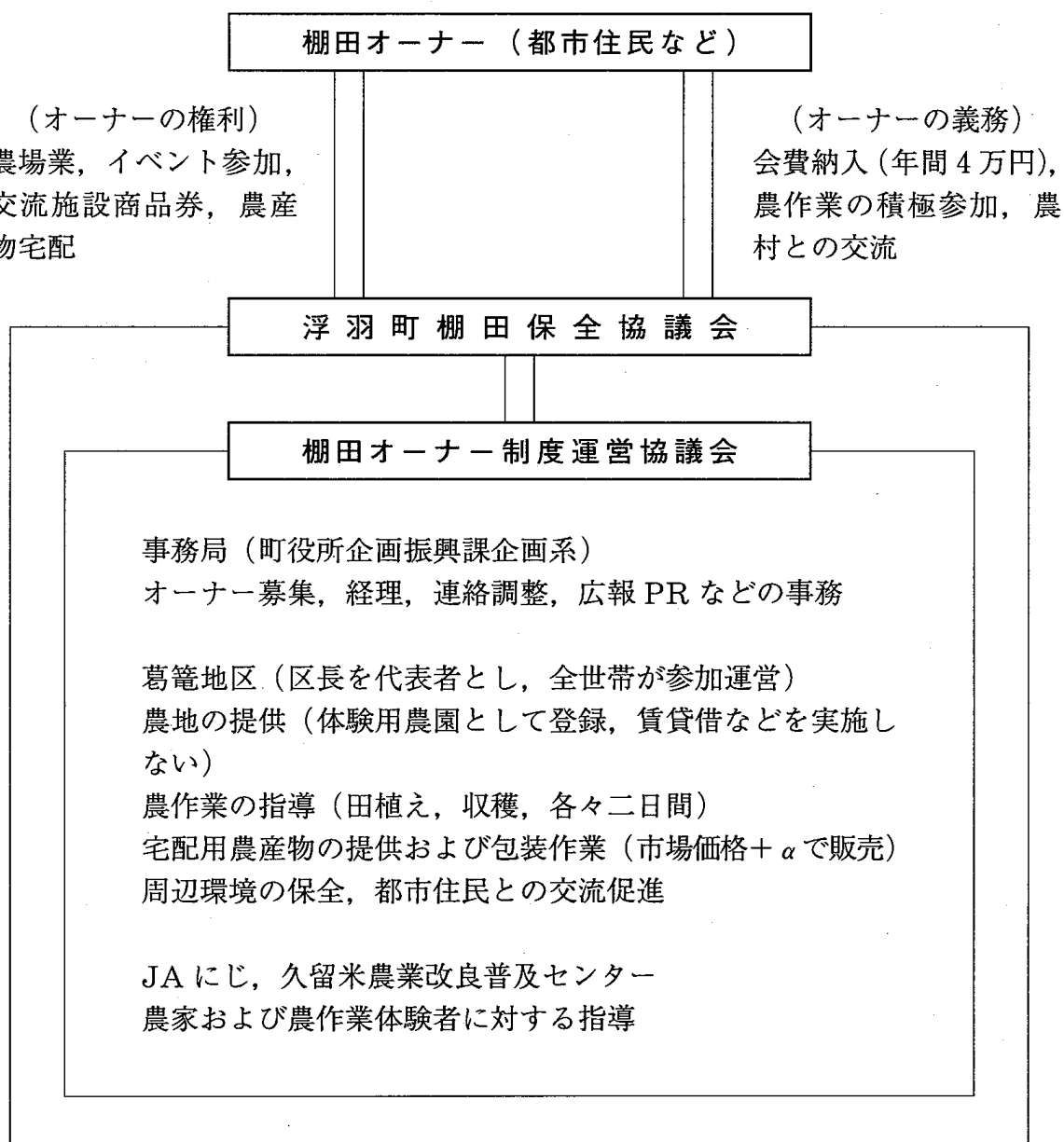
前者は2002年6回を迎えたが，そこに集まる人々はおおよそ1週間に2万人に達し，今日，浮羽のグリーン・ツーリズムのシンボルになっている。1999年，2月と4月“イベント部門”と“美しい景観コンテスト”部分で各々大賞および優秀賞を受け取ったことはすでに指摘したが，そのような受賞はこの溪谷のグリーン・ツーリズムの実情をうまく評価しているといえるだろう。後者，すなわち

“棚田オーナー制度”とは、葛箆地区に散在する棚田100㎡を1区画にし、一定の会費（年4万円）を納入した会員（オーナー、入園者とも呼ばれる）に1年を期間にし農作業（田植え、刈り入れ）の体験を楽しむ一方、対象農地（自分の田んぼ）で収穫した米（棚田の米はきれいな水と低農薬で栽培するので良質である）30kgを受け取り、また、①その町で生産された新鮮な農産物・加工品などの宅配サービス、②岩溪谷の交流施設である“四季の舎、長岩”の利用に対する特典を享受する制度である。

1997年10月19日、この制度の実施内容と会員（オーナー）募集を西日本新聞に広告した結果、すぐ213人が町内外（他県出身4人：定員75人）から集まったと言う。選定された会員75人には1998年3月会員証を発行し、オーナーと確定された。彼らは5月30-31日の“田植えまつり”（参加者50組、181人）と9月19-20日の“収穫祭”に参加し、家族と共に農作業を体験しながら美しくて静かな山村の景観を楽しんだといわれている（浮羽町棚田の保存協議会1998、1-3）。この制度の概要を図式化すると、〈図3〉のようになる。

この制度に対する評価は1999年末、99人の会員を新しく募集した結果、“続けて会員になりたいと希望した人”が84%を超えたことからわかるように良い方である。その詳細は、第1次年度事業が一旦終わった後、実施したアンケート調査結果によく現れている。即ち、“田植えまつり”にたいしては“よかった”、“大体よかった”と肯定的に答えた人が29人（参加者31人）で93.5%を占め、“収穫祭”にたいしても参加者（30人）の86.7%が“よかった”と答えている。また、2回以上の訪問者が応答者（42人）の92.8%を占めているが、その中にはこの制度がきっかけになって浮羽町を初めて訪問した人が50%（26人）を占めている。この制度は浮羽町のグリーン・ツーリズムの中核事業ともいえるであろう。（浮羽町棚田保全協議会1998、7）

その後、オーナーは2002年には113組にまで増えたが、今年は88組に減らし



〈図3〉 浮羽棚田オーナー制度の概要

ている。応募者は多いものの受容能力に限界があるからである。

このように静かな山の溪谷，それも交通が極めて不便な上流に人々が集まり始
まると，何より早急な課題は彼らを受容する交流施設であった。このようにして，
誕生したのが“四季の舎，長岩”である。“四季の舎”は1997年着工し，その次
の年に完成されたが，工事費は総305百万円かかった。主な施設は，体験教室，
休憩室，レストラン，台所，浴室，特産物直販場，野外広場，遊歩道などである。

特に、その運営方式はいわゆる“官設民営”であり、地区の人々に雇用の場を興えると同時に野菜の栽培、山菜の採取、地鶏の飼育などを促し、地区の農業保全にも一役をになっている。このように“四季の舎”は、開館以降交流促進センターとしての役割を果たし、山村（新川地区）の活性化に大きく寄与している。

③妹川地区：滝の溪谷のムラづくり

巨瀬川上流に位置する妹川地区は、1985年八女郡星野村に通じる道路沿いに“調音の滝公園”を整備してから、来訪客が増え始め年間7～9万人の人々が集まってくる。この来訪客を対象に地域住民が運営する「巨瀬の里」では農産物とその加工品を直販し、年間300万円あまりの収益を上げている。

ほかにも、この溪谷の特産品であるお茶と果物の無人販売所があちこちにある。交流イベントは“持木竹林まつり”、“調音の滝公園滝びらき”、数年前、オープンした農家民宿を中心に開かれる“滝の溪谷ジャズコンサート”などが有名である。

特に、1995年山林庁によって、“水源の森百選”に選定された“調音の滝公園”では調音の滝、魚返りの滝、斧淵の滝など三つの滝が美しさを争うほど美しいところで、バンガローと流水プール、“そうめん流し”には多数の人々が集まってくる。

④山春地区：“道の駅うきは”：浮羽グリーン・ツーリズムの情報発信・地域連携の拠点

“道の駅うきは”は国土交通省と浮羽町が共同で推進した事業で浮羽のバイパスと国道210号線が合流する地点である山春地区大字山北西見台に建設、2000年4月1日オープンした浮羽町グリーン・ツーリズムの拠点施設である。

“道の駅うきは”の建設目的は都市と農山村の交流を図る浮羽町のグリーン・

ツーリズムの「情報発信」、「地域連携」、「休憩」の機能を担い、町内のイベントや観光地への誘導機能をはじめ、浮羽町の魅力と特徴を広く紹介し、さらに各々散らばって、活動している町事務所、商工会、JA 虹（農協）、森林組合、観光協会などの力を合わせて、より魅力的な事業を推進することで農林業と商業、そして観光産業の振興をはかるというところにある。言い返すと、各々散らばっている浮羽型グリーン・ツーリズムの交流拠点を一つに束ねるコアともいえるだろう。すなわち、“串団子理論”でいう「串」の中心といえる。

“道の駅うきは”の施設内容と運営方式・実績などの概要は次の如くである。

◎主な施設

- ・物産館－ 372.0m²（物産直売所、事務所、お手洗いなど）
- ・レストラン館－ 483.75m²（体験研究室、会議室、レストラン、農村情報室など）
- ・出会いの広場－ およそ3,000m²（青空市場、イベントなど実施）
- ・体験コーナーおよび展望台－ およそ600m²（西見台で筑後川沿いの平野が見られる）
- ・インフォメーション施設（国土交通省が建設）－ 情報発信室など
- ・駐車場－ 大型車8台、普通車101台受容

◎施設の運営

第3セクターである“浮羽の里株式会社”が担当する。資本金は5千万円で、出資内容を見ると、町が2,720万円（55%）で一番多く、次はJA 1,500万円、森林組合500万円、商工会250万円、観光協会30万円の順である。町の負担金は“農業構造改善事業費”から捻出したと知られている。

◎施設の利用者および収支計画

利用客数は当初年間267,248人を予想していたが、実際オープンしたらその実

績は予想を大きく上回った。オープン初年度はわずか9ヶ月（4月～12月）で、立ち寄り客は376千人、売上額は406百万円に達している。2年目（2001）は537千人、売上額は653百万円に達しており、浮羽町の入込客100万人達成に大きく寄与している。

このように「道の駅うきは」に毎月平均4万人以上の来客をたち寄せるのに大きな役割をしているのは特産品の直販所である「西見台」であるが、その運営主体は「西見台出荷組」である。この「組」は地元住民たち12人によって構成されており、彼らは年間2万種類以上の農産物および特産品を季節に応じて提供している。これが月平均4万人の来客をたち寄せる原動力になっているといわれている。

3. グリーン・ツーリズムの社会経済的成果

今まで、浮羽町のグリーン・ツーリズムの導入とその推進内容を概観してきた。では、はたしてグリーン・ツーリズムは町内に期待した成果をもたらしたのだろうか。その成果は経済的波及効果と社会的成果の分析を通じて接近することができる。言い返すと、浮羽グリーン・ツーリズムの基本理念がどの程度実現しているかを尺度にして検討すべきである。

しかし、総合的な成果を測定するにはまだ早い。“浮羽町ふるさと農業活性化基本構想”（1995）を実践に運び始めてからやっと7年、財団法人21世紀村作り塾によって“グリーン・ツーリズムモデル育成地区”に選定された時（1995年10月）からは6年半にすぎない、“グリーン・ツーリズムモデル整備構想：浮羽町計画”が策定されてから（1998年3月）、やっと4年にすぎなかったからである。言い換えれば、浮羽町のグリーン・ツーリズムはまだ、成果を判断するには歴史が浅い。したがって、ここでは具体的な分析よりはグリーン・ツーリズムの核心

要素ともいえる交流人口の動向と彼らによる消費支出を中心に浮羽町グリーン・ツーリズムの成果を検討しようとする。

1) 入込客の推移

2000年、1年間に浮羽町を訪ねた来訪客の数は次の〈表4〉からわかるように、10,495 百人で前年に比べ345 百人、3.4 %が増えている。浮羽グリーン・ツーリズムの元年ともいえる1995年に比べ、554 千人余り、112 %（年平均30.2 %）ほど増えているが、この期間中の日本経済の長期不況を考えると増加傾向はけっして小さくない。1997年以降、“棚田オーナー制度”の開始、“四季の舎”のオープン、2000年4月「道の駅うきは」のオープンなどが入込客急増の主な理由である。

しかし、来訪客のほとんどは日帰り客で、その5.4 %である563 百人のみ泊まり客である。なお、宿泊客のほとんどは筑後川温泉などのホテルに泊まるお客で、農家民宿などのいわゆるグリーン・ツーリズムの交流施設に泊まったお客の数は少数にすぎない（〈表4〉参照）。それ故に、これからどのように入込客の絶対数を増やすのかという問題と共に、一旦訪ねてきた来訪客を農家民宿などのグリーン・ツーリズム型の宿泊施設に泊まらせ、農林業を体験させ、さらに住民との人間的交流を楽しむようにすべきかという問題こそ浮羽のグリーン・ツーリズムが解決すべきこれからの課題といえるであろう。

〈表4〉 入込客の推移（千人）

年 度	1995(GT 元年)	1997	1998	1999	2000	2001	2002 (%)
合 計	495	547.4	570	570	940	1,015	1,049.5 (100.0)
日帰り	—	410.5	423	424	794	962	993.2 (94.6)
宿 泊	—	136.9	147	148	146	53	56.3 (5.4)

〔註〕2000年以降は「道の駅」利用者を含む

資料：浮羽町企画振興課

2) 経済的効果

では、彼らは町内でどの程度消費支出をやったのか。次の〈表5〉は1997年と2002年の各種催し別来訪客数と彼らの消費支出の内容である。それによると、1997年1年間に来訪客が支出したお金はおよそ11億5千万円であったが、2002年には18億3千余万円に増加している。この金額が多いのか、少ないのかは端的に言い難い。ただ、浮羽町の主要生産物の一つである米の生産額が4億14百万円（1999年）であり、浮羽の代表的な経済作物である果樹生産額が28億14百万円であることを勘案すると、けっして少ない額とはいえないであろう。さらに、観光支出は地域経済に及ぼす乗数効果が農産物に比べ、遙かに大きいという事実を勘案すると（イカンオク1997, 60-73）、グリーン・ツーリズムの浮羽地域経済への波及効果はけっして軽視できないだろう。

このような現象は町民一人当たり所得の増加率にも現れている。1999年、浮羽町の町民一人当たり所得は2,049千円で、前年の所得に比べ5.9%増えている。当年県全体の平均増加率は△0.7%、郡部だけで2%に過ぎなかった事実を勘案すれば、浮羽町のそれが大きいといわざるをえない（「福岡県統計年鑑」平成12年。P.100）。このような現象がただちにグリーン・ツーリズムの成果だと断言するのは難しいだろうと思うけれども、少なくともプラス効果があったのは否定できないだろうと推断される。

次には催し（旅行目的）別に一人あたり平均消費額を見てみよう。やはり消費支出がもっとも多いのはゴルフ場利用客で平均1,515千円を支出し、次は果物狩りの455百円、一般行楽参加客（154百円）の順である。1997年と2002年を比べてみれば、総額は増えているが、その増加率は入込客の増加率に及ばないので、一人当たり平均消費額は減っている。長引く不況のせいではないかと思う。

最後に、グリーン・ツーリズムの経済的効果を判断できるもう一つの指標ともいえる“朝市”や“直販”施設での販売状況を見よう。〈表6〉は浮羽町の代表

〈表5〉 入込客の催し別支出内容（1997, 2002：単位百人, 千円）

利用目的別		一般行楽	イベント 参加	文化財 見学	キャンプ	果物狩り	ゴルフ	その他	合計
項目									
	入込客総数	3,541	1,260	170	9	156	168	170	5,474
		8,663	1,180	111	0	215	206	120	10,495
宿泊別	日帰り	2,970	716	96		89	95	139	4,105
		8,100	1,180	111	0	215	206	120	9,932
宿泊別	宿泊	571	544	74	9	67	73	31	1,369
		563	—	—	—	—	—	—	563
居住別	県外客	1,523	542	73	4	67	72	84	2,365
		2,166	295	28	—	54	52	30	2,625
居住別	県内客	2,018	718	97	5	89	96	86	3,109
		6,497	885	83	—	161	154	90	7,870
交通便	定期交通便	177	63	6	1	8	8	8	271
		433	59	6	—	11	—	6	515
	貸切バス	708	252	34	2	31	34	36	1,097
		1,733	236	22	—	43	—	24	2,058
交通便	自家用	2,301	819	111	5	101	109	117	3,568
		6,497	885	83	—	161	206	90	7,922
交通便	その他	355	126	19	1	16	17	9	543
		—	—	—	—	—	—	—	—
消費支出	宿泊費	409,459	185,169			52,633	162,280		797,789
		531,909	—			—	—		531,909
	お土産購入費	120,786	56,929			15,722	46,368		236,445
		741,364	60,423			97,905	—		899,692
	地域内交通費								
その他	58,678	28,355			7,368	23,184		115,905	
	60,270	30,098			—	312,080		402,448	
消費額計	588,923	270,453			75,723	231,840		1,150,139	
	1,333,593	90,521			97,905	312,080		1,834,049	
一人当たり 平均消費額 (円)	平均消費額 (円)	166,315	214,645			485,404	1,380,000		210,109
		153,941	76,712			455,372	1,514,951		174,754

[註] 上段は1997, 下段は2002

資料：浮羽町企画振興課

的な“直販”施設と“朝市”の開催日およびそこでの販売状況を見せている。それによると、農協（JA）が運営する農産物直販場である，“土の里”は毎週土曜・日曜日と水曜日午前中のみ開かれるが、年間約2,500万円の売上高を上げており、妹川地区の人々が毎週日曜日、お茶など、地区の特産物と手作り“まんじゅ”などを共同販売する“巨瀬の里”は約300万円の売上高を上げている。“巨瀬の里”は町民の共同直販場であるが、毎週日曜日の朝、各自が出荷する品物を持ってくると、当日の当番が販売し、夕方に精算する方式で、当番は町民が回りながら輪番制で決定される。山村の素朴な人情と共に共同体的性格の一面を見せてくれる断面ではないだろうか。

〈表6〉 浮羽の朝市，直取引施設とその利用現況（1998）

施設名	開催日	売上高	備考
浮羽ヨカモン市	毎週日曜日	年間約250万円	温泉朝市
JA“土の里”	毎週土，日，水曜日午前	年間約2,500万円	農協が運営
“清水湧水”隣の無人販売所	毎日	年間約100万円	無人販売
“巨瀬の里”	毎週日曜日	年間約300万円	町民が輪番制当番

*“ヨカモン”とはよい品物という意味の九州地方の方言

3) 社会的効果

次に、浮羽のグリーン・ツーリズムが社会的にどのような影響を及ぼしているのかを検討して見よう。周知のように、社会的効果は経済的效果と違い、客観化できる計量的指標を持たないのが難点である。したがって、ここでは「浮羽グリーン・ツーリズムの基本理念」である、①「地域住民にプライドを持ってもらう」という側面と、②「都市住民の理解と支持を得る」という二つの側面から、どれくらいその理念が実現されているのかをみることによって、社会的効果の分析を試みたい。

まず、浮羽の住民たちがグリーン・ツーリズムを通してどのくらい郷土愛を育て、自分たちの町についてプライドを持つようになったのかを見てみよう。1997年秋、筆者が初めて浮羽町を訪れた際の感想は、「何もない」というものであった。しかし、再び1999年4月下旬に訪問した際、受けた浮羽の印象は全然違うものであった。この時期はちょうど浮羽町が1999年に入って二つの大きな賞を受賞した直後である。すでに指摘したとおり、浮羽町は同年2月に農林水産省の主管する「日本の美しいムラ景観コンテスト」において優秀賞、そしてその4月には自治省が主管する「わが町のイベント」分野のコンテストにおいて「棚田 in 浮羽彼岸花」が「地域活性化センター」から優秀賞を受賞したのである。

このような受賞の経験は浮羽の住民にとって「やればできる」という自信感とともに、わが町は日本でも有数の美しい町であるという自負心を呼び起こすのに大きな役割をしたと考えられる。筆者たちを案内してくれた町役場のH係長は、浮羽町の全地区を誠心誠意を持って、ときには熱っぽく説明してくれた。ユーモアを加味した彼の説明はこの上なく詳細で専門的であり、なおかつ親切だったので我々を大いに感動させた。彼のうきうきしているところが我々にもよく伝わっていたのである。そのうきうきしている様子は彼の自信と自負心の産物であることを考慮すると、浮羽のグリーン・ツーリズムはその基本理念を徐々に実現していると思われる。もちろん、H氏個人を以って全体を評価するには無理があるかもしれない。しかし、彼がグリーン・ツーリズムを企画し主導している主務係長であるという点を考慮した場合、必ずしもそれが一個人の主観的な気持ちないしはパーソナリティーであると軽く付することはできないであろう。

では、町外、すなわち都市住民たちは浮羽町および浮羽のグリーン・ツーリズムに対して、どのように理解し、又、応援しているのだろうか？次はこの点に関して検討して見ようと思う。

浮羽町は1998年、「第一回棚田オーナー制度」の収穫祭を終えた後、都市住民

〈表7〉 棚田アンケート集計表

	参加	参加 不参加	31 11	四季の舎 長岩	従業員の 対応	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	21 4 9 0 0
	評価	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	25 4 2 0 0		レストラン 食べ物	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	10 7 15 1 1
彼岸 花めぐり	参加	参加 不参加	8 34		入浴施設 売店	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	15 6 10 2 1
	評価	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	6 2 0 0 0		駐車場 遊歩道	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	13 6 11 2 2
棚田 収穫祭り	参加	参加 不参加	30 12	棚田 オーナー 制度 (全般)	訪問回数	0回 1回 2回 3回 4回 5回	1 2 10 10 6 13
	不参加	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	23 3 2 0 2		料 金	非常に高い 大体高い 妥当 大体安い 安い	4 13 24 1 0
農産物宅配 サービス	数量	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	27 5 8 1 1	棚田以外のことで浮羽 町を訪問したことがあ る。	訪問した 訪問してない	21 21	
	内容	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	24 9 8 1 0	農業・農村に対するイ メージが変わったのか。	変わった 変わってない	25 17	
	時期	非常によい 大体よい 普通 そんなによくない よくない	30 3 7 2 0	棚田オーナー制度を 1999年度にも継続する か。	する しない	38 7	
四季の舎 長岩	利用	していない している		対象者：75人 面収者：42人 (3人は別に申込書だけを送ってきた)			
	商品券	全然利用してない 一部利用 全部利用	16 13 13				

たちが浮羽および浮羽町のグリーン・ツーリズムに関してどのように理解し支持しているのかについて、アンケート調査を行ったのは上述したとおりである。

〈表7〉がその結果である。その表から分かるように、あらゆる項目において回答者の大半が肯定的な評価をしており、特に「農業・農村に対するイメージは変化したのか」という設問に対しては約60%が浮羽町の棚田を中心とする各種プログラムを通して「変化した」と答えている。さらに、「棚田」に関するプログラムを通して初めて浮羽町を訪れた人が回答者の50%を占めており、翌年(1999年)にも「棚田オーナー」として引続き参加を希望した人は84.4%に達した。このような結果を総合的に判断してみると、浮羽町のグリーン・ツーリズムは外部からある程度の肯定的な評価と理解を獲得するのに成功を収めたといえるだろう。何よりも二つの受賞がそれを物語っていると思う。

このような事実は、2000年2月、「棚田名刺」希望者を応募した結果にも明らかに現れている。「棚田名刺」というのは、浮羽町の棚田を中心とした五つの名所をテーマにして作った名刺であるが、それを2万部作り、配布希望者を募集したところ大変な評判で、ただちに品切れになり、さらに2万部を作らざるを得なかった。その名刺をもつ人が自分とは何の縁もない地域の名所を自身の名刺に印刷してそれを初対面の人に出すというのは、「私は浮羽の人か、あるいはその支持者です」という意味を含んでいるのではなかろうか。要するに、浮羽町はわずか25万円(郵送料含む)の費用をかけて4万人の支持者を町の外から集めたことになる。この辺にも浮羽グリーン・ツーリズムの基本理念がよく実現されているといわざるを得ない。

4. 結びに代えて

以上、筆者は浮羽町におけるグリーン・ツーリズムの導入経過と展開過程およ

びその成果などを考察してきた。成果判定にはまだ、期間が短いとはいえ、幾つか注目すべき成果も上げているのが事実である。

では、浮羽町グリーン・ツーリズムには問題がないのだろうか。そうでもない。むしろ解決すべき課題が少なくないと思われる。その中で、重要なことのみを整理して見ることでむすびに代えようと思う。

第一に、どのように入込客、特に滞在型訪問客を増やすのかという問題である。年間来訪客 100 万人は常駐人口（17 千人）に比べ、けっして少ないとはいえない。しかし、宿泊者は 5.4 % ほどに止まり、小国町の 32 % に較べるとまだ大変少ないし、特に注目すべきことはその数が減っているということである。したがって、農家民宿など、グリーン・ツーリズム型宿泊施設の増設とその利用客を増やせることが切実に要求される。

第二に、今後の課題と密接に関連された問題であるが、浮羽への交通便はもちろん、町内の交通便も改善すべきである。特急列車が止まらない。高速バスを乗るためにはほかの町まで行かなければならない。したがって、特急列車の停車と共に高速バスの立ち寄り方を講じるのが急先務であるといえる。それと共に、町内の道路を拡張し、直線化し循環機能を高めるべきである。その場合、自然環境の保全に注意を注ぐことは言うまでもない。

第三に、浮羽の特産物である果物の高付加価値化とグリーン・ツーリズムとの連携方案の模索である。言い換えれば、苦勞して生産した果物をそのまま出荷する量を減らし、“ヤマンドン”のような農家レストランを増設し、果物の高付加価値化と交流人口の増大を連携させるべきである。

第四に、推進方式の問題である。すなわち、浮羽型グリーン・ツーリズムの特色は民間が先に出て、行政当局は後ろから押す。いわゆる官民の“協調的内発融合型”ともいえる。しかし、まだ、官主導の色合いが濃い。“グリーン・ツーリズム研究会”をはじめ、“夢酔塾”、“棚田オーナー制度事務局”など、すべて

のグリーン・ツーリズム推進組織の事務局は町役場にある。これからは民間推進主体の育成と組織化にもっと力を入れるべきである。そうするためには、グリーン・ツーリズム推進の主役になれる人材を育成すべきである。そこに“ふるさと創生人材育成基金”をより果敢に投入する必要があると思われる。

最後に、「道の駅うきは」と他の交流施設との連携を強化することである。年間60万人にも及ぶ立ち寄り客を町内の他施設へ誘導させ、「道の駅」が名実共に浮羽グリーン・ツーリズムの「串」の役割を果たすようにするのが次の課題ではないかと思う。

以上のような課題が解決されると、浮羽町のグリーン・ツーリズムの見通しは明るいと思われる。福岡市、北九州市のような大都市と隣接しており、町内に多様な資源を持っているからである。

《参考文献》

- 朴 光 曙, 「中山間地域の農業的特性と政策対応」, 全南大学校『アジア太平洋地域研究』第1巻第1号。1998. 8
- 朴 光 淳, 「日本の中山間地域の活性化とグリーン・ツーリズム—九州北部地域を中心に」, 全南大学校『アジア太平洋地域研究』第1巻第1号。1998. 8
- , 「農漁村の活性化とグリーン・ツーリズム—日本の事例を中心に」, 全南大学校『地域開発研究』第30巻第1号, 1998.12
- , 『日本山村の地域経済と社会政策』, 景仁文化社, 2001
- 安元 泰 監訳, 『農村で休暇を送ろう』, 河西出版社, 1995
- イガンオク, 『観光開発が地域経済に及ぼす波及効果』, 韓国観光研究院, 1997
- 宮崎 猛, 『グリーン・ツーリズムと日本の農村—環境保全による村づくり』, 農村統計協会, 1998
- , 『これからのグリーン・ツーリズム—ヨーロッパ型東アジア型へ』, 家の光協会, 2002
- 角松正雄 編, 『地方自治体の経済政策—九州地域を中心として』, 熊本商科大学産業経営研究所, 1994
- 安達清治, 『ツーリズムビジネス—日本と世界の旅行産業』, 創成社。1997
- (財)21世紀村づくり塾, 『1996年度グリーン・ツーリズム推進地域事例集』, 1998。
- , 『グリーン・ツーリズムの計画と実践—地域経営の具体化に向けて』, 1997

- , 『グリーン・ツーリズム推進事業報告書—地域経営と環境創造』, 1996. 8
- , 『グリーン・ツーリズム推進事業報告書—地域経営と環境創造(Ⅱ)』, 1997. 3
- , 『日本型グリーン・ツーリズムの創造1—ソフト化社会と地域経営』, 全国農業会議所, 1996
- (財)九州経済調査協会, 『魅力ある郷土づくりをめざして—浮羽町町勢振興基礎調査報告書』, 1986
- 小塩のホタルの里づくり協議会, 『今, ホタルの里は花盛り』, 1999
- 浮羽町棚田保全協議会, 「棚田オーナー制度に関するアンケート調査資料」(未出版), 1998
- 浮羽町, 『グリーン・ツーリズム推進事業報告書—福岡県浮羽町の挑戦』, 1995
- , 『第3次浮羽町総合計画, 後期基本計画, H10—14』, 1997
- , 『浮羽町山村活性化ビジョン』, 1994
- , 『グリーン・ツーリズムモデル整備構造制定事業支援活動報告書』(未出版), (株)日本コミュニティ研究所, 1997
- , 『ものしり資料館(UKIHA DATALAND)』, 1993
- , 『浮羽町史』1987
- , 『広報浮羽, 第275号—335号』
- 福岡県, 『福岡県統計年鑑』, 1995(H7), 1999(H11), 2000(H12)
- 福岡県, 『浮羽地域振興計画, 人・地域・自然が輝く「みのう悠々交流圏」の創造』, 1995